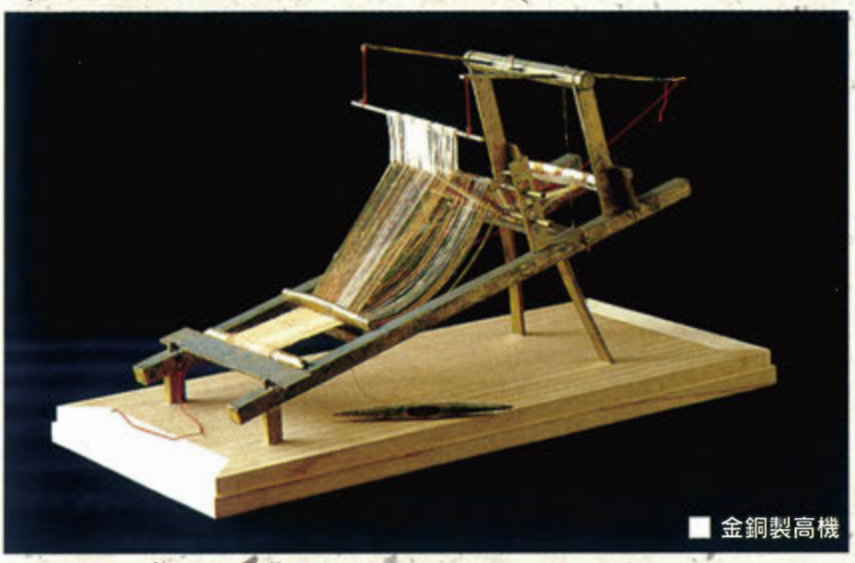
宗像

沖ノ島

国宝、約八万点に――
神宝の一括国宝が決定

今年三月、国の文化審議会による国宝・重要文化財指定の答申により、沖ノ島から出土した鏡や装身具、金銅製馬具、武器、武具、土器などの神宝約二万九千点が、既に国宝に指定されている「宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品」に統合・追加指定され、古墳時代～平安時代初期（四世紀後半～十世紀初頭）の沖ノ島祭祀遺跡出土品全てが一括国宝になる運びとなり、話題を呼んだことは記憶に新しい。

六月九日付の『官報』号外第一三二号における告示により、この沖ノ島祭祀遺跡出土品の国宝一括指定が正式に決定した。この慶事を迎えて、長年にわたり国宝一括指定の実現に努めてきた当大社職員や関係者らは喜びに沸いている。



■金銅製高機

沖ノ島は、太古より人々から崇められてきた聖なる島で、島の中腹には沖津宮が鎮座する。元来、「胸形君」をはじめとする在地の人々の篤い信仰の下にあったが、古墳時代～平安時代初期にかけては、社殿の周りに広がる巨岩群の各所において、大和王権による大規模な国家的祭祀が行われた。その姿を物語る宗像大社沖津宮祭祀遺跡（沖ノ島祭祀遺跡）からは、昭和二十九年から昭和四十六年までの学術調査によって、当時の海外交流や宮廷祭祀を顕著に示す国内外の優品が豊富に発見されている。

沖ノ島が「海の

▲新規国宝の撮影風景

7月祭事暦

毎月1・15日 月次祭
午前10時
高宮祭
第二宮・第三宮祭
引き続き
宗像護国神社
月命日祭（1日）
巡　　拝（15日）
午前11時～
総社祭
浦安舞奉納（1日）
豊栄舞奉納（15日）

21日 中津宮七夕揮毫会
午前9時
於＝筑前大島 中津宮

31日 夏越の大祓神事
午後5時
於＝神門前
引き続き夏越祭
於＝本殿

余滴

当大社では、沖・中・辺津宮の三宮それぞれに御神水が湧き出ているが、最近「水取り」に来られる方をよくお見かけする。特に、自由に水を汲むことができる大島・中津宮の「天の真奈井」は、延命招福の名水としてTV等で紹介されたこともあり、休日ともなれば、島外からも多くの方々が押し寄せている▼健康ブームにより、飲料水の多様化、或いは浄水器を始めとする機器の普及、河川の浄化運動等、水に対する我々の喚起は深まる一方である。反面、人間が引き起こした公害環境破壊問題でも水が深く関わっており、深刻度は増すばかりである▼昨年三月ついに国連は「私達は過去五十年間で地球の生態系の六〇％を消失した。このままあと五十年経つと地球は回復不可能となる・・・」と四年がかりで調査した結果を発表した▼今日、様々な環境保護施策が盛んに実施されているが、鎮守の杜は水や空気の浄化・ヒートアイランドの防波堤となっており、我々の先祖から受継がれた生活の知恵が注目を浴びている。進化ばかりが是ではないのでは。（T・H）

神具・装束　結婚式場調度品
福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番
本　店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)～4番
(075)343-3341番
井筒

木組の家　匠の技
総合建築業　株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元1025　電話(0940)32-2567

正倉院」と称される所以である。

当大社では、平成十三年に耐火金庫から未指定の出土品二三六点が見つかったことを契機に、文化庁や県教育委員会と収蔵品の整理調査を始めた。五年に及ぶ調査の結果、古墳時代～平安時代初期の祭祀遺跡出土品の総数が約八万点に上ることが確認された。また、このうち約二万九千点が未指定品であることがわかったため、国宝への追加指定がなされたのである。

▲記者会見の様子

これに併せて、これまで重要文化財「伝宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品」の指定に留まっていた金銅製高機、香炉状品など、学術調査以前に不時発見されて辺津宮へ移管されていた伝世品四四点も、確実に沖ノ島祭祀遺跡の出土であり、国宝指定の学術調査出土品には無い希有なものを含み、沖ノ島ではなく、約一〇万点になることも判明した。当大社は、本調査で確認した数字を最も正確なものと結論付け、今後は数字の修正を周知することにしている。また、沖ノ島祭祀遺跡出土品の細かな内訳も確認できた。これらは沖ノ島祭祀について学術的検討を加える上で、重要なものとなるに違いない。内訳を整理し、将来公にできるよう、引き続き精査することが今後の課題である。

■金銅製香炉状品

■三角縁三神三獣鏡

祭祀の意義をさらに高めるものであるとして、国宝に統合された。これをもって、国宝一括指定が達成されたのである。

整理調査では、縄文時代・弥生時代の生活遺跡出土品などを含めた沖ノ島からの出土品の総数が、これまでの一二万点

この度の国宝一括指定により、古墳時代～平安時代初期の沖ノ島祭祀遺跡出土品の総てが、学術的に等しい評価を受けた。沖ノ島の価値の高さが名実共に実証されたといえよう。当社職員一同、神宝の保管に万全を期すよう、一層気を引き締め、神徳の発揚、文化の啓発につながるよう尽力していきたい。

最後に、この度の一括指定においてご指導、ご協力を賜った皆様方に、心から御礼申し上げます。

当社では、今秋に、沖ノ島神宝の一括国宝記念とした特別展を開催する予定です。詳細は改めて、本誌にてご紹介いたします。どうぞお見逃しなく！

■ガラス製小玉

沖津宮現地大祭

波高三mの中渡島、約三二〇人が渡島参拝

▲出港前の大島港

初夏の潮香る五月二十七日、年に一度一般参拝者の渡島が許される沖津宮現地大祭が斎行された。

三月下旬より、全国から申し込みをされた方々の中から、厳正に抽選し選ばれた約二二〇名の参拝者は、前日の二十六日に筑前大島に渡島。同島の中津宮社務所で受付を済ませ、午後六時から中津宮において沖津宮渡島安全祈願祭に参列し、無事渡島を祈念された。祭典終了後、神島宮司より明日の大祭斎行の意義、葦津禰宜より渡航に際しての総括説明がなされ、次に参拝者は十班に分かれ、担当神職より諸注意が行われ一同解散した。この日は風が強く、海上も波が高い悪天候であった為、明日の渡島を一同心配しつつ、各自大島の宿泊施設に参籠した。

大祭当日、幾分風は治まったものの、早朝より激しく雨が降り始めた。渡島は、海上も波高二、五～三mと依然時化の状態が続くが、日本海海戦百一年目の今年、この祭事を永世に亘り継承すべく新しい節目の年であると、漁業関係者と協議の上、宮司の英断により出港が決定された。

午前六時半、大島渡船「しおかぜ」を皮切りに大島漁協所属漁船沖一丸、第三沖栄丸、海栄丸、第七春日丸、第八宮地丸、第十一宮地丸、海上タクシー宝栄丸は続々と大島湊を出港した。

玄界灘の荒波の中、船に揺られること約二時間で沖ノ島に到着、神の島は霧に包まれ、全貌を拝することはできなかったが、その姿は神秘的で幽玄さをたたえていた。

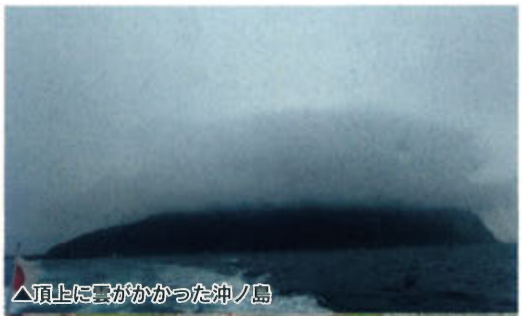
上陸後、参拝者全員直ちに海中にて禊を行い、心身共に清め、沖津宮御祭神「田心姫神」の鎮まる御本殿へと原生林の生い茂る参道を進んだ。

午前十時、沖津宮現地大祭斎行。御神前には全国各地の参拝者からの御神酒・奉献品がお供えされ、神島宮司が国家・皇室の安泰、そして日本海々戦で命をかけて戦った日露両国の兵士の慰霊・世界平和を祈る祝詞を奏上。次々に各代表者が玉串を捧げて、敬虔な祈りの中祭典は滞りなく終了した。

その後、波止場で沖・中両宮奉賛会、同翼賛会の皆様により調理された刺身、煮魚、その煮汁で食べるソーメンに一同舌鼓を打ちながら、神の島の一時を過ごした。

正午、参拝者は各船に乗り込み、沖ノ島を出港、午後二時過ぎには、全船大島に到着、参拝者はその場で解散となり、それぞれ帰路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来ない女性・子供は、大島の沖津宮遥拝所での祭典に参列し、遥か沖ノ島に祈りを捧げた。


▲頂上に雲がかかった沖ノ島

▲禊風景

▲現地大祭

▲今年も参列された吉村早大教授

第六回

出光興産㈱中堅社員研修

宗像大社合宿研修を終えて

出光興産の将来を担う中堅社員を対象とし、今回で六回目となる研修が、五月十二～十四日の二泊三日で開催され、研修生三十三名に、引率の人事部山元教育課長以下二名の計三十六名が当大社で過ごされた。

この研修は一・二次で構成され、当大社における研修は一次研修の皮切りとなるもので、全国各所から選抜された方が職場を代表し参集した。終日白衣・白袴で過ごし、毎朝の潔斎、夜の鎮魂等を通して、宗像で生を受けた創業者(故出光佐三氏)の思い、出光人とは、日本人とはどうあるべきかを、充分感じ取っていただけたようである。研修後の感想をここに掲載させていただきます。

「宗像大社から学んだこと」

出光興産北陸支店販売課　斎藤　範彦

恥ずかしながら、入社以来、宗像大社を訪れたのは今回が初めてであり、今回機会に恵まれたことは大変幸運でした。

喧騒を離れての研修は、白衣、白袴、足袋を身に着け、潔斎、朝拝、鎮魂といった儀式を通じて神様と向き合うといった、崇高でまさに非日常の世界でした。一方、随所で店主の郷土愛、敬神崇祖の思いの一端に触れることも出来ました。

今回の参加メンバーの誰もがそうであるように、最も印象に残った出来事は、辺津宮拝殿と高宮祭場での鎮魂ということになるでしょう。板間や玉砂利での悠に三〇分を超える正座は、例えようもない苦痛でその間トラブルもありましたが、何とか全員やり通しました。

最初の十五分位はまさに「魂を鎮める」境地。夜、辺りは真っ暗、聞こえるのは風の音、鳥の羽音、虫の音。そんな中でゆったりとした心地で魂が鎮まっていくのがわかりました。(その後、足の痺れから魂は再び暴れだし、地獄の数十分が続くのですが…。)

宗像研修のあと、場所を平川寮に移し今度は議論三昧の日々。役割行動分析で自分の心の根底を見つめ直した時、一つの気づきがありました。普段の仕事生活で自分に欠けているものは、宗像の鎮魂で感じたあの「ゆったりとした気持ち」「心のゆとり」であると再認識しました。

十五日間の研修を終え、金沢に戻ってきて、職場復帰します。宗像大社の鎮魂で感じた「心のゆとり」、この気持ちを大切にしたいものです。

「宗像大社研修を終えて」

北海道製油所　業務課　奥山　暢

はじめて宗像大社を見て大変大きいことに驚きました。店主が大事にしていた宗像大社について、より知識を深めることができました。又、神拝作法や鎮魂などを教わり、実行し貴重な体験をすることができました。

特に鎮魂においては、運良く板の間と、玉砂利の上と両方での体験をすることができました。普段、長時間正座をすることのない私は、足の痺れから意識がなくなりそうになった時に終了しホッとしました。

今回教わったこと、経験したことは一生大事にしていきたいと思っています。大変忙しい中、私達の為に時間を作って頂きありがとうございました。

「宗像大社研修を終えて」

基礎化学品部生産管理課　石田　路彦

神社での生活は初めてであり、期待と不安というよりは、不安の方が大きいスタートではありましたが、辺津宮本殿を目にして、少しばかり心が落ち着いた気がしました。

研修は朝の潔斎、朝拝から夜の高宮での鎮魂に至るまで、様々な厳かな儀式を行い、改めて身の引き締る思いがしました。

研修中の神宝館見学では数々の国宝・重要文化財を目にし、古代人の信仰心の厚さ、技術の高さに触れることができました。

また、大島に渡り、中津宮参拝、沖津宮遥拝所からの遥拝もさせていただきましたが、残念ながら沖津宮は見ることができませんでした。心が澄んでいる方には、あるいは見えたかも知れません。

と、厳粛な気持ちを中心に書かせていただきましたが、最も印象深かったのは、朝拝、鎮魂における正座です。これは堪えました。あの痛みは忘れることはないでしょう。

最後になりますが、神島宮司はじめ宗像大社の方々には大変お世話になりました。本所感をもちまして、御礼の言葉とさせていただきます。誠に有難うございました。

平成十八年度 宗像大社氏子青年会総会開催

去る六月一日宗像大社斎館において、宗像大社氏子青年会定例総会が開催された。

昨年三月二十七日、設立総会が開催されてより当初三十五名であった会員も一年を経て四十四名に増加した。昨年中は発会初年度という事もあり数度の役員会を重ね、十月三日には秋季大祭高宮神奈備祭奉仕、通年での神道勉強会開催などの活動が行われ、徐々に会の方向性が決定されていった。

当日の総会において、役員改選が行われ以下の通り変更となり承認されましたのでご紹介いたします。

嶺 保成 新副会長

戸波 真也 新副会長

小林 栄二 新会長

平成十七年度	役員
会長	吉武 邦彦
副会長	久田 龍幸
副会長	小林 栄二
監事	磯部 輝美
監事	吉武 倫彦
相談役	吉井 英海
理事	戸波 真也
理事	吉原 賢治
理事	嶺 保成
理事	田中 郁三
理事	中野 和久

平成十八年度	役員
会長	小林 栄二
副会長	嶺 保成
副会長	戸波 真也
監事	磯部 輝美
監事	吉武 倫彦
相談役	吉井 英海
相談役	吉武 邦彦
理事	吉原 賢治
理事	田中 郁三
理事	中野 和久
理事	中山 博之
理事	吉武 大作

平成十八年度 第一回宗像大社氏子会総代総会開催

五月晴れの五月十八日、清明殿で本年度第一回目の宗像大社氏子会総代総会が開催された。

開会に先立ち本殿にて正式参拝が行われ、終了後会場を清明殿に移し、佐藤副会長の開式により開会となった。

今回来賓挨拶として、衆議院議員渡辺具能氏秘書の佐伯様より挨拶が行われた。

総会は安部氏子会長を議長に選出し、議事の審議に入り、事務局より平成十七年度氏子会事業・決算報告並びに、古屋敷監事より決算監査報告が行われ、全員一致で承認された。次に平成十八年度氏子会事業計画案・予算案の説明が事務局より行われ、こちらも全会一致で承認された。

また、昨年度より就任いただいていた津屋崎地区より選出の吉永監事さんより、本年度を以ち役員任期終了の旨が伝えられ、後任に久保田正和評議員さんが地区から選出されたとの報告を事務局より行い、総会にて承認された。

次に、氏子会費取り纏め依頼の件、六月の氏子会研修旅行参加申し込みの件等事務局より説明を行い、各総代へ協力をお願いした。

最後に本年度より総代・評議員を新たに就任頂く方への委嘱状伝達式が行われ、該当者を代表し宗像市五月ヶ丘の吉田秀実評議員さんに宮司より委嘱状が渡され、城野副会長の閉式にて氏子会総会は終了した。

本年度より新たに就任頂いた、総代・評議員さんにおかれましては、これからの大社の諸行事・祭典等へのご協力をお願い申し上げます。

久保田正和 新監事

第九回 筑前玄海魚まつり

六月三・四日の両日、宗像市の鐘崎・神湊の漁港で「筑前玄海魚まつり」が本年も開催された。

この催しは、玄界灘の豊かな海の幸をPRするため平成十年に地元の鐘崎・宗像両漁業・宗像観光協会などでつくる実行委員会が主催し、今年で九回目の開催となる。今年のテーマは「食育」、その名も（つかんで、さばいて、いただきます！）とした新企画が登場し、メイン会場となる鐘崎漁港での看板イベント「魚つかみどり大会」で捕った魚を子供と保護者が実際にさばき、フライなどにして食べるという試みであった。調理指導は地元漁師の奥様方が担当し、主催者側は「実際に魚を取り、さばいて食べることで命を頂いているということを感じてほしい」と狙いを語った。

両日とも好天に恵まれ、両会場共に大変な人出となり、その他の「ふれあい食堂」、「餅撒き」「地引き網体験」等々恒例の催しも大盛況であり、主催者側の発表によると今年の来場者は三万人という事であった。

宗像市の海と魚をPRするこの「魚まつり」の今後の更なる盛り上がりに期待したい。

金美齢先生御参拝

五月二十一日(日)午前十時、台湾総統府国策顧問、JET日本語学校理事長で評論家の金美齢先生が御参拝されました。当日は、「今、日本を考える」と題して、宗像ユリックスを会場にむなかた市民大学・ゆめおり主催の講演会の合間を縫っての正式参拝。御来社後早々に昇殿され、玉串拝礼の作法も丁重に深い祈りを捧げられました。続いて神宝館を拝観、沖ノ島の古代祭祀の説明に興味深く聞き入られていました。

先生は、昭和三十四年に訪日され、早稲田大学・同大学院に御留学、在学中より日本で台湾独立運動の指導をして来られました。日本の文化に造詣が深く、日台両国友好の掛け橋として陳水扁総統からの厚い信頼も受けています。『大中華主義はアジアを幸福にしない』等の著作やテレビにも多く出演され、日本で今一番有名な台湾人です。

先生の御活躍と御健勝を心よりお祈りしております。

(続) 海の寄物

205

いしい ただし

周防大島は、はじめての地であったが、何か宮本常一の温い目ざしのようなものが感じられる島であった。

島を案内していただいたみずの出版の柳原一徳氏は「ここに戦艦陸奥の記念館があるので寄ってみませんか」と誘われた。

昭和十八年六月八日正午頃周防大島の沖、柱島付近に碇泊中の陸奥が突然大爆発し、瞬時に沈没したのである。そんな大事件が戦争中にあったのは知らなかった。高校生の時に、戦記物ではじめて知った。

▲陸奥記念館

▲引き上げられた陸奥14cmの砲

昭和十八年といえば日本は海陸ともに苦戦していた。十七年六月にはミッドウェーでの惨敗、十八年四月には山本五十六連合艦隊司令長官の戦死…。

戦艦陸奥は、大正十年十一月のワシントン軍縮会議が開かれる前に完成しておかなければ、未成艦として廃艦が予想されたため、突貫工事で建艦が行われ、十月に竣工にこぎつけられた。基準排水量三九、〇五〇t、全長二二四・九m、幅三四・六m、速力二五kt、備砲四〇cm八門、一四cm砲一八門、水上偵察機三機を搭載、改装を重ねながら、煙突を誘導煙突とした。従来の艦が直立型であったのが、後方になびくように曲っていた。陸奥という国名は猛々しい響きがある。勇壮な印象を与えるし艦姿も恰好よく、雑誌や教科書にも紹介され、同型艦の長門と共に人気があった。「陸奥と長門は日本の誇り」とカルタにもうたわれたという。

碇泊中の突然の大爆発、瞬時の轟沈、爆沈時は濃霧が内海を厚くおおい、大爆発音と黒煙がたったものの、多くの人々に目撃されることはなかった。海軍は徹底的に極秘を貫き、周辺の島や沿岸の立入りを厳禁し、遺骸は焼却、漂着物の回収を徹底して行い、秘匿した。

乗員一四七四名、生存者三五三名であった。生存者は外部との接触が禁じられ、太平洋の最前線に送られ、終戦で帰還したのは六〇名であった。

原因は一体何か、「陸奥爆沈」(吉村昭)は当時の資料や聞きとり調査を検証している。①砲弾(式弾)の自然発火②米軍による雷撃③スパイの謀略④爆薬庫の放火という「人為的な事故」をあげ消去法で「人為的な事故」が残った。日本海軍の爆沈は、明治三八年日本海戦の旗艦三笠からはじまり、大正七年の戦艦河内の六艦に及んでいる。それらは人為的な事故が絡んでいた。海軍の主力中の主力として長門と共に君臨し「米英の新式戦艦に対して充分対抗できるものとして期待されていた」(日本軍艦百選)その海軍のエースがあっけなく瞬時に爆沈したのに、海軍首脳部は驚愕したのである。

陸奥記念館に入った。引き揚げられた遺品の数々、陸奥の模型や写真もあった。なぜか売店には陸奥のパンフレットや図録は一切販売されていなかった。館の横にある公園に、一四cm砲やスクリューが展示されていた。吉村昭は「軍艦は多種多様の人間をつめこんだ容器であることを(中略)実感として感じとった。組織、兵器の根底に人間がひそんでいることを発見した」と同書おわりで述べている。

▲戦艦陸奥

平成十八年度 夏越の大祓神事 御案内

恒例の夏越祭が近付いて参りました。このお祭りは、大祓神事を中心に行われ、夏季に流行する悪疫を除去し、皆様方の心身の罪・穢を人形に託して祓い除き、清々しい気持ちで、毎日を無事に過ごしていただくための祈りを込めた神事でございます。

本年も左記の通り斎行致しますので、皆様お誘い合わせの上御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

日時　七月三十一日　午後五時～

場所　大祓神事　引き続き　夏越祭斎行　宗像大社

氏子・崇敬者　各位

宗像大社形代(かたしろ)について

当大社では、古く一千数百年前から、交通安全や身体安全を祈って様々な人形・馬形・船形などがお供えされております。このことは、宗像大社が道主貴(あらゆる道に通じる最高神)として多くの人々から篤い崇敬を受けている永い歴史を物語るものであります。

第五三九回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日〆切

宗像市 鐘崎 安永 久子
此の幾日黄砂まともに吹きすさび拉致されしごと島も消えたり

評 年々激しくなる黄砂に対する嘆き、下句の比喩がお手柄。

うきは市 浮羽町 向 則正
夜勤明け休むいとまもなきままに食事すましてしごとにいづる

評 働くことの幸と辛さ、結句「野良にいでゆく」など仕事の内容が判ると一層いいのだが。

福津市 若木台 野間 精一
どくだみの白き小花も待ち遠し春花終りしわが狭庭辺に

評 このままでもいいが、二句から三句「小花を待ちてをり」と押えた表現もある。

福津市 中央 池浦 千鶴子
孫のなきわれら夫婦の遺伝子もこれで終りかお茶すすりあふ

評 少子化日本のとある家庭の嘆き、共感者も多いだろう。

福津市 中央 中村 勇
食事後はデザートのごと薬飲む妻ともどものこの三年間

評 夫婦共にあることの幸せ。薬の種類、時間を間違ぬようして下さい。

宗像市 田久 巻 桔梗
五百年をやしろ守りきしとふ楢に生ひ積もりたる苔あをあをし

評 四句やや言い過ぎか。

宗像市 大井 木原 ふさ子
里川の浅瀬のあたり動くもの掌よりも太き草亀

評 「動くもの」に作者の一瞬の驚きが出ていい。

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子
脳内の引出し開かず今しがた置きたる物のありか忘れぬ

評 一二句の比喩抜群。

福津市 星ヶ丘 佐々木 和彦
干潟なる水の流れは細々と夜明けの蒼き明かりを帯びる

評 繊細な感覚ゆえの一首。それだけに初句の「なる」が気になる。

宗像市 日の里 大和 美由紀
代掻きの済みし水田に鷺の群餌を求めて舞ひ降りて来る

評 はじまる農作業への賛歌の一風景。

宗像市 池田 森 龍子
光り合ふ若芽撫づればやはらかし春の息吹きの温みと思ふ

評 春到来のよろこび。

福津市 在自 増田 武光
還歴の迫りてたどる山みちに高々と咲く藤をことほぐ

評 還歴自祝のうた。

宗像市 田野 森 甲子
日もすがら降る雨憂しと吾ゐるに柿の若葉ははしゃぎて揺るる

評 老と若との対比を柿の若葉を通して描き出し佳作。

宗像市 ひかりヶ丘 清水 亜矢子
朝日あび岩にのぼれる亀達をかげからそっと日々見守るも

評 亀たちを見守る作者の優しい気持が伝わってくる、素直な一首である。

福岡市 南区 井田 有久衣
車椅子にのりゐるままで時忘れピアノに合せ童謡うたふ

評 入院生活のなかのひとときのよろこび。

宗像市 日の里 白土 千早
夕暮時赤ちょうちんに煙ゆれわが世の続き熱く燃えつきぬ

評 上句の状景は面白いのだが下句は観念的で判りづらく残念。

選者詠

牡丹の花ひらきたり家系図は幼く逝きしものの名多し
夕光のさし入る川にくろき影鯉とたしかめ歩みを返す
女体礼賛の象徴としも年老いしムンクは縁に陰を描けり

第五一四回 俳句作品集

宗像市 東郷 田中 憲象
急されて急がぬ石の風車

宗像市 光岡 井上 嘉治
肩車嬰兒の頬染む下がり藤

福津市 在自 増田 武光
金毘羅は鰐の神さま春祭

宗像市 日の里 花田いつ枝
老鶯や山なす護摩木崩るなし

宗像市 東郷 宗風社俳句会 吉武 湧泉
咲く花も散りゆく花も風情あり

宗像市 東郷 宗風社俳句会 吉田 杏子
とりどりの彩に牡丹の咲き揃ふ

宗像市 東郷 宗風社俳句会 三浦美千代
ふくろうにおびえたる日のなつかしき

宗像市 東郷 宗風社俳句会 田中 雨葉
老鶯や頻りに荒き樵る音

宗像市 東郷 宗風社俳句会 木原 房子
日を追ふて白さ増しゆく大手毬

編集後記

日本残念でした。何よりF組の勝敗結果が事前に機械が予想した通りの結末だったことがとても残念でした。評価に値するのは、キーパー川口選手の孤軍奮闘と、中田(英)選手の試合分析だけでした▼采配が悪い、FK・決定的場面で決められない…日本中がそれぞれに思ったでしょう。ですが、敗因はただ一つ、「日本サッカーの歴史がまだ浅い」ということでしょう▼平素は野球で、サッカーはワールドカップしか見ない、にわかファンですが、「柔能く剛を制す」といった日本のサムライサッカーをはやく目にしたいものです。それが四年後なのか、八年後なのか、もしかしたら同年の中田(英)選手が監督をしている頃かもしれませんが。(M・O)

発行所 宗像大社社務所 宗像会
〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311(代)
発行人 伊藤佳和
編集人 大塚宗延
制作 ゼネラルアサヒ
印刷 ゼネラルアサヒ
定価1年送料共1,000円